◉特別寄稿

日本における「京劇」公演の歩み

津田忠彦

はじめに

今年（二〇一六年）で三一年目を迎えた中国演劇の「京劇」を日本で公演する仕事を終えたばかりです。五月二八日に東京で幕を開け、名古屋を経て、大阪を六月一一日で千秋楽としました。三〇年を終えた昨年に越し方に思いを致す暇もなく、翌年の準備に入るのは毎度のことで何とも忙しないことではある。そんな日常の中で我が京劇の有り様を振り返る機会がなかった。今改めて「日本の「京劇」公演の昨日・今日・明日」と題して、日本での私どもの京劇公演活動のあらましを振り返ることにしてみたい。この稿を書くにあたって、一九八六年がこの活動の端緒を開いた年でありその前後が草創期にあたる時代といえるが、それを「昨日」と定めて話を進めてみたい。

昨日——発端

「昨日」の時代は私にとって、まさに草創期にあたり、あらゆる意味で錯綜していた時でもあった。私は財団法人日本青少年文化センターの演劇部門の制作を引き受けて、新見南吉の原作を筒井慶介氏の脚色でシリーズ化して学校巡演活動に投じて《花のき村の盗人たち》《牛を繋いだ椿の木》に続いて三作目の《ごんごろ鐘》に取り掛かっていた。

日中国交正常化の重い扉が開かれて十年の歳月が流れ、一九八三年に中国から胡耀邦総書記が来日した。彼は破天

荒とも言える企てを発表する。日本の青年三〇〇〇人を中国に招待しようというのだった。これに応じた日本側はさっそく、各種の団体に呼び掛けて青年団体を募ったようだ。その間のことは何分急な話で詳細を知らない。具体的に私のところに来た話は、この三〇〇〇人交流団に加わり十数名の団長として参加せよという至上命令めいた話だった。

当時、劇団世代の代表として財団法人から演劇部門の制作を引き受け、また、全国の高等学校を対象に魯迅原作の「阿Q正伝」「藤野先生」を劇化しての巡演活動を続けていたが、この魯迅作品に在日本中国大使館から訪中公演の話が飛び出し、当時中国との「話劇」（当時の日本流に申せば「新劇」か？）の交流を専門にしていた日中演劇交流話劇人社（任意団体）に関わりを持ったばかりだった。この集団では新米理事である私を含んだ十数人の青年代表団が急拵えで作られたが、さて団長をということになったらしい。

四〇代に入ったばかりながら青年とは言いにくい年齢といえたが、他の団体を見ると五〇代、六〇代の団長も数が多く、エーイままよとばかりに三〇〇〇人交流の話劇人社青年代表団の団長をお引き受けすることになった。この交流事業が実施される同じ年の一九八四年一二月には私自身は劇団世代の団長として、「藤野先生再見」公演団の一行を率いて北京、上海、杭州を巡演することが内定をみていた。三〇〇〇人の日本人交流団は三つに分けられ、我が団は上海から入って杭州に抜け、そこから北京へ向かうというコースを辿った。上海での賑々しい大歓迎を受けて杭州に入って落ち着く間もなく杭州観光に移る。西湖遊覧の折に浙江省京劇団の主演女優王小軍女士と出会った。彼女は中国全国青年連合会が準備した私どもの接待要員だった。

私が自己紹介で学生、生徒に見せる芝居を専門にしていることを話したせいで彼女の目標にされてしまった。私の戸惑いをものともせず、ぜひ我々の団長に会ってくれと言いだした。こんなところにも京劇を日本に招聘しようとする芽が吹き出していたのかもしれない。もっとも、日本での公演活動を共にした浙江省京劇団の団長陳江容氏と出会うのは何年か先になるのだが……。

「京劇青少年劇場」の誕生

話劇人社のプロデューサーとして仕事することを余儀なくされて使い回されるのは、この組織が持つ中国とのネットワークの広さがいろいろな仕事を生んでいったためでもあった。国交十年を過ぎた日中間に各種の交流活動が活発化していた。日本中の地方自治体が中国の省、市と独自に結んだ友好提携の絆は、その結実を模索して記念行事の話が急展開で持ちあがり、中国からあらゆる芸能団の派遣が

始められた。歌舞団、雑技団、複数の芸能で混成された団がこうした記念行事に招かれる例は数知れず行われた。これらの活動には私もコーディネーターとして、自治体からの依頼で臨時雇いのお役人役をやらされた。

「京劇」が学校教育の場に行くという提案は話劇人社で決定した。経済的責任はこの団体が受け持つことになった。この企画を、私が評議員をしていた財団法人日本青少年文化センターに持ち込んで承認を得て「京劇青少年劇場」が誕生した。これを期に私は火のついたような日々に忙殺されることになった。公演に来てくれる京劇団を探し求めなければならない。中国には二〇〇を超える京劇団があったが、その中でコネクションがある京劇団は数少ない。友人、知人の紹介を受けてもその数は微々たるものだった。条件が厳し過ぎたかも知れない。

日本公演に呼べる京劇団への条件は訪日メンバーを二十名以内に抑えることだった。ツアーの人員は日本人スタッフをギリギリに絞っても三十名は超えられない。経済的、機能的な面から考え抜いた私なりの結論といえた。知るかぎりの京劇団に声を掛けてみたが、皆慎重を期して、三十数名と答えてくる。浙江省京劇団の王小軍女士にも連絡したが、電話連絡が上手くゆかずこれも流れた。劇団世代の《藤野先生再見》の折に知り合いになった上海戯劇家協会に飛び込んでこの話をしてみた。心当たりを聞いてみようという回答を得たが期待できそうにもなかった。思案にくれていた折、上海劇協でこの話を聞いたという朱実先生から電話が入った。

映画「寅さん」(『男はつらいよ』)の字幕をこなした実績を持つ上海人で「瞿麦(くぼく)」という俳号を持ち、呼吸するように俳句を吐くという日本語通でもある。数年前に知り合った老酒の呑み仲間でもあった。彼の電話はこうだった。「自分の妻が京劇の師と仰いでいる女優さんがおり、一六人で団を作ってもいいと言っている。メンバーは皆一流どころの粒よりだ。団長は院から正式派遣されるので正確には一七人になる」。結局、この団を率いてきたのが私の京劇招聘の草分けになる斉淑芳師だった。

斉淑芳師との出会い

斉淑芳師は上海京劇界の名武旦(ぶたん)(立ち廻りを主とする女性役)と謳われ、斉派(せいは)を名乗るという。上海京劇の事情を知る朝日新聞の演劇記者に問い合わせると、彼女には会ったことがあると言う。上海京劇院が創った現代京劇の名作《智取威虎山》の取材で上海を訪れた折に出会った最も印象的な武旦だったという。来日するならインタビュー取材もしてみたいとの言、私は一も二もなくこの話に飛びつくことになった。

上海京劇院訪日公演の企画は出来上がった。後になって京劇団招聘には下見や稽古の見学その他の要件を含めて数回の訪中を繰り返す手順を踏むのが通例になるが、この時は時間が切迫しており、電話の連絡で済ませることになった。今にして思えば電話での連絡が不便な時代だった。通訳嬢としてその頃に苦労してくれたメンバーには頭が下がる。一方、国内の高校や中学校の芸術鑑賞行事の対象として取り上げてもらおうという狙いは悪戦苦闘を強いられていた。学校現場を担当する教諭が「京劇」そのものにほとんど無知に近いという事実を改めて知ることになる。「京劇」とは「京都の劇という意味か？」といった珍問答が飛び出したりした。折からの日中国交正常化十周年の勢いの中で国際交流という名目が学校では幅を利かし、どうにか、一一月を中心とした約一カ月のツアーの計画は準備されていった。

予定された上演演目は《盗仙草》《三岔口》《孫悟空・大鬧天宮》《青石山》《猪八戒背媳婦》《拾玉鐲》《秋江》で豊富にして充分と思えた。これを一六人で演じ切るという。作品の構成は斉淑芳師の来日を待って決める以外にない。ファックスと電話以外に連絡が不可能だった。待ち構える日本側スタッフには緊張の色あいが濃くなってきた。なにしろ京劇という中国の「伝統劇」の舞台を初めて体験することになるのだ。集ってくれたスタッフは私の芝居仲間のベテランばかりで、むしろ新しい試みに大いに興味津々といった風情。何も知らないということを除けば皆、真摯だったと言えようか。

斉淑芳師の舞台は見応え十分の素晴らしいものだった。その後、私どもが招聘したどの団にも見劣りしない舞台成果が得られた。彼女が帯同したメンバーは丑役者（道化役）として中国内で高名を馳せたベテラン孫正陽、孫悟空役者として定評を集めていた張全元、二枚目の武生として格調高い演技を披露した丁梅魁、明るい人柄で一座の人気をさらった武丑の韓奎喜。彼らを適材適所に生かした名舞台を見せてくれた。「折子戯」といって人気演目の名場面を特集した形を踏襲させてもらった。

「折子戯」は本来京劇愛好者用に上演されたものらしいが、初めて京劇に接する若い人たちには絶好の舞台構成と言えて三〇分以内の演目が数本並ぶ。武戯（立ち回りを見せる戯）、文戯（唱を聞かせる戯）を交互にすることで観客の興味にバラエティを持たせることにもなる。観客は中学生千数百人、開幕と同時に打楽器の演奏が始まる。静まった客席に銅鑼や太鼓の賑やかしい演奏がよく通る。「京劇」をやれているという実感が私を満たしていた。子供たちが見たこともない衣装をつけた俳優が登場すると初めはやはり静まり返っているものの、舞台上の役者たちの所作に見入る観衆の中から尋常でないものを感じた子供た

ちは「おうっ」と歓声を上げた。やがて「亮相」に遠慮がちな小さな拍手が沸いた。それが幕切れには大きな拍手となって客席を覆っていった。カーテンコールに応じる俳優たちも皆満足げだった。

斉淑芳師の八面六臂の活躍は武戯、文戯にかかわらず、充分な効果を発揮した。日本側のスタッフたちも「案ずるより産むが易し」で、キャストや楽隊のメンバーとも和気あいあいのうちにツアーを打ち上げた。翌一九八七年にも彼女ら一行を迎えたい意欲が出て同じ企画でお呼びした。盛況だった。四七ステージを組み込んだ。

さらに一九八八年の秋にも斉淑芳一行を呼ぶ予定を立てたが、彼女たちは春にニューヨークへ出向いていて帰国を拒否した。言わば亡命だった。数年後にはニューヨークで斉淑芳京劇団を興し、主演の舞台に立ち続けていると聞いた。彼女たちは現在では帰国することもできるようになっているらしい。彼女はその京劇普及活動に対し米国大統領から感謝状を受けるという栄誉にも浴している。嬉しいことに学校を対象にした公演活動も範疇に入っていることも耳にした。

後に上海戯曲学校の卒業が間近くなったメンバーばかりで史敏、厳慶谷中心の若々しい団を受け入れることになったが、これは斉淑芳の置き土産といった感が強い。年末から正月にかけては、打ち合わせのためにほとんど上海にいた私を上海戯曲学校へ誘いこの学校の演目をよく見せられた。彼女は史敏、厳慶谷の二人を特に推薦し、「私が上海から行けなくなったら」この二人を中心に団を作って日本への公演に呼ぶことをしきりに提案した。未だ十代であどけない表情の史敏や厳慶谷を見た私は、「いくらなんでもまだ早いだろう！」と彼女の言い草に驚いて笑ったが、私は意味を聞き違えたのか……、思い返せば、それが斉淑芳一団のニューヨーク行きの伏線だったようだ。

中国対外演出公司

一九八六年秋にはじめた招聘の仕事は、上海京劇院を中心に上海戯曲学校、浙江省京劇団を加えて回り始めた。いつまでも上海京劇院だけでもあるまいと感じていた私は文化部直属の京劇団である中国京劇団を招聘する発想を持っていた。文化部副部長劉徳有氏にご挨拶に行く機会に恵まれて、北京の文化部に出向いた。私はその数年前に劉徳有副部長にすでにお目にかかっている。彼が部長補佐の時代に《藤野先生再見》の中国側受け入れの最高責任者として手厚く私どもを迎えてくれたものだった。彼はかねてより「京劇の日本招聘」に大きな関心を示してくれていた。お会いした折に、私は「京劇生誕二百周年」に当たる一九九〇年に中国京劇院を加えることができないかという無謀と

も言える相談をしてみた。そしてにこやかな表情の彼から「努力してみよう」の言を得ることに成功した。ほぼ確実な成果を得たことに私は満足した。

この提案は文化部直属の劇団を招聘することで他の京劇団への影響を思ったからである。直後に私は中国対外演出公司に招かれた。中国対外演出公司は国際的な芸能関係の総合窓口であり、国外への公演団の派遣活動や、国内で実施される海外からの公演団の受け入れ機関でもある。私が経験した劇団世代の《藤野先生再見》もここのお世話になっている。総経理李徳宇氏を中心に幹部が総出での出迎えだった。私が上海経由で北京入りしたことは先刻ご承知で「上海ではろくな御馳走も出なかったでしょうから、北京の料理をたっぷりとご堪能ください」とさっそく上海を皮肉ってみせた。どうも北京人と上海人はむかしから仲が良くないらしい。

話が佳境に入り、貴方が招く京劇団が上海と浙江省に偏っているのは何か理由があるのかと尋ねられた。その折、傍らに宋麗紅女士がいた。彼女は終始控えめで日本語の通訳を務めてくれた。初めは通訳嬢かと勘違いした。後の副総経理で私の京劇団招聘の水先案内人にもなってくれた人である。私どもにとっては大恩人の一人とも言える存在になった。時の総経理の問いに私はこう答えた記憶がある。当然、各省各市に京劇団がひしめくようにあるのは知っているが、それらの劇団に連絡を取る手段に欠けていることやその劇団の様子を知らないままでは私らには手が出ない。仲介の労を取ってくれるならば二三〇団になろうという全国からの京劇団を呼ぶこともやぶさかではない、と。しかしこれはどう考えても大言壮語といえるが。さっそくその場で劇団選定に入る手回しの良さである。まず天津京劇の話で持ちきりになった。天津は北京が京劇の誕生した街とすれば、それに次ぐ京劇の聖地であるとする論が飛び出した。ひと時代前の政府関連組織の幹部には京劇一家言を持つ老幹部たちがひしめいている感があって、何やら妙に盛り上がってこの会はお開きになった。その日のうちに翌日天津に行く予定が定められた。

翌日、宋麗紅女士は対外演出公司の車を手配すると私を乗せて天津青年京劇団を目指した。天津は今でこそ北京から直行列車に乗るとものの三〇分足らずで到着するが、車ではフルスピードで悪路を飛ばしても優に一時間は必要とする。到着は昼食時にかかっていた。北京から中国対外演出公司の職員が劇団視察のために、海外派遣の専門家（どうにも口はばったいが、これは私のことなのだ）を連れて劇団訪問をする。この指令が行き渡ると劇団は稽古場を整え、演目の準備に追われ、天津市文化局は担当役人を揃えて食事の接待の準備にかかる。といった具合で万端整えて私どもを待っていた。稽古を見るまえに食事の饗応とな

り、白酒の乾杯をすすめられるが稽古の前だからとお断りした。宋麗紅女士は平然と乾杯を受けている（白酒は穀類の蒸留酒でアルコール度数が四〇度から六〇度以上もある強い酒である）。彼女は地方の文化局では酒豪として通っていた。

一九九四年に江沢民主席の談話で「伝統劇の改革」が打ち出され、文化部からその具体的内容が翌年の一月に通達されて以後、海外に向けて公演することが奨励されていたものらしい。この後、北京の海外派遣機関の職員と日本から来た京劇招聘の専門家のコンビでの地方行脚は続けられるが、地方の文化庁、文化局へ出向いても交渉事はすべからくスムーズに運んだ。大連京劇団、北京京劇院、黒龍江省京劇院、福建省京劇団と回を重ねていった。招聘のことはつつがなく運んでいった。

「天安門事件」

「今日」時代の兆しが飛び込んだ。「昨日」と「今日」の有り様の差異は画然と時間で区切ることは不可能なのだけれども、まさにこれは「昨日」の時代に飛び込んだ「今日」の兆しといえた。一九八九年の「天安門事件」だった。

日本人の中国に対する感情は一時急激に冷えた。この影響が直ぐに表れたのがこの年の秋に組み込んだ地方自治体の公共文化施設の自主事業の一般向けの公演だった。「京劇」そのものがよく知られていないことへの試みとしての意味合いを含んでいた。自治体から初めて中止の申し入れを受けた。館長自身からかなり立腹した態で電話が入ってきた。日本人の中国への国民感情の悪化の始まりと言えた。すでに公演を決めている学校からも問い合わせの電話がしきりに入ってきた。実施の方向を伝えて了解を得る作業に追われた。

二〇〇一年の小泉首相靖国参拝はこうした状況に拍車をかけて「反中」「嫌中」といった現象さえ生み出し、加えて折からの中国の急速な経済的発展を受け「中国脅威論」をメディアが騒ぎ立てたりした。「京劇」の日本国内での振興を図ろうとする私どもには辛い時が来る予感はあった。「今日」の予感は常に存在し、やがて政治的軋轢の中で「政冷経熱」と称される時代がやってくる。

宋麗紅女士というビジネスパートナー

宋麗紅女士は地方の文化関係者に知人が多い。「ここの外事弁公室には室長として大学時代の同級生が居る！」「どこそこの文化局長はお友達！」といった調子でどこへ出向いてもなにがしかの関係を持っていた。顔が広いのである。私の北京滞在が頻繁になってくると、彼女は自宅か

らほど近いホテルを使うことを勧め、宋さんご一家と夕食を共にするのが習慣になってしまった。

その頃『光明日報』の社長兼編集長だったご主人を交えてまだあどけない年頃の娘さんを加えての四人の食事会だったが、彼女は北京では決して白酒は飲まない。地方の文化行政関係者との酒宴の様子はおくびにも出さない。ご主人のジョッキのビールをタンブラーグラスに少し分けてもらうのが常であった。何かと忙しい仕事に追われる毎日を過ごす彼女ら夫婦は住まいに近い四川料理のレストランを贔屓にしており、そこを我が家の台所と呼んでいた。ちなみにご主人はその後『人民日報』社長兼編集長を経て、現在、第十八期中国共産党中央政治局委員、第十二期全国人民代表大会常務委員会副委員長という、偉い人である。

彼女はある種、奔放ですらあった。「津田さん、ハルビンの氷祭りってご存じ？」から始まって「私はまだ行ったことがないのよ」「黒龍江省の外事弁公室に同級生が居るんだけど、ぜひ来てみたらって言ってるの」「ここに黒龍江省京劇団という劇団があるんだけど一度ご覧になる？」といった案配で劇団選定に動き出すこともある。彼女の提案で長白山登山にも挑戦してみた。張家界の鍾乳洞にも入った。雲南省石林も訪れた。普段の劇団訪問の旅は原則的にホテルと劇団の稽古場を往復するのみになる。観光地には入り込まない。何しろ時間が足りないのだった。山東省済南の山東省京劇院の稽古場に通い詰めた折には、済南に来て泰山に登らないのはもったいない云々の大勢の声に負けずに済ませた。

彼女との全国行脚は続き、大連京劇団、北京京劇院、吉林省京劇団、遼寧省京劇院、江蘇省京劇院、北京京劇院、山東省京劇院、上海京劇院、湖北省京劇院、大連京劇団、北京京劇院、上海京劇院、福建省京劇団、湖南省京劇院、雲南省京劇院、山西省京劇院等の京劇団、院と延べにして五〇を超える団に京劇公演をお願いすることになった。

学校京劇公演の危機

中国国内の京劇団との関係は良好であり、より良い環境作りを目指せたものの、日本の市場は荒れ果てていた。学校における私どもの企画は当初見事に教育現場の好評を勝ち取り、同じ学校から二年連続しての公演も企画された。この好評を聞きつけて学校の現場に参入してきたのは、イベント業者だった。「京劇」が当たりを取っていることを聞き込んだ彼らは京劇団の招聘に乗り出してきた。中国からの国際旅費が経費の嵩む大きな原因であることを知ると対応は早かった。

京劇団や雑技団、歌舞踊団等を退団して留学生として日本国内に溢れた連中を再構成して団を結成する業者が一気

に増えだした。彼らは雑技、歌舞等を交えた京劇団を構成して低価格で学校に持ち込んだ。京劇の特徴である生の民族楽器演奏との関係性等はそっちのけである。録音テープを使用したりした。教育現場の「京劇」という格調高い授業は消えていき、安直な中国的雰囲気のイベントが増えた結果この種の出し物は学校から消えていった。

もとより資本が豊かではなかった日中演劇交流話劇人社は経営の危機を迎え、営業母体を一九九三年に株式会社オーロラ・オーバル社に移して、私はそのアジア文化事業部として中国イベントをより質の良い方法で持ち込める方策を練った。学校に京劇を持ち込むことはどこかで断念しなければならない予感に襲われていた。それに取って代わる演目として「大戯」といって全編を上演する方策を考えてみることにした。「折子戯」を長いこと続けてきて全編を通しで見たいという観客が増えていることを見越したものだった。しかし「大戯」は出演者が多く経費が一層嵩むことになる。通しの出し物はこれまで上海京劇院の《扈三娘と王英》を史敏と厳慶谷でテスト済みだった。もう一本、大連京劇団で楊赤の《九江口》をやっている。今や師匠の袁世海を越えるだろうと噂される楊赤の《九江口》を私自身が見たかったからだった。

大戯志向

「大戯」の公演の実現にはどうしてもマスメディアの助けがいる。私はこの話を会場と予定するサンシャイン劇場の社長と日本経済新聞社文化事業局、テレビ東京に持ち込んでみることに着手した。各社でこの経費を分けて共同で持ち合う気がないかという問いかけである。それぞれが劇場費、宣伝費の相当分を持ち合うという提案だった。日本経済新聞社の奥村裕孝氏がよく京劇の公演に顔を見せては、「面白いですね」という感想を漏らしてくれる。「面白い企画があるんですがね」との誘いの言葉に耳を貸してくれたので大連京劇団にある種の申し入れをしていることを話してみた。すでに奥村氏とは馴染みになっていた楊赤・李萍のコンビで《覇王別姫》を通しで上演してみたいが、三社での共催という可能性はないだろうかというかなりの難問を発してみた。文化事業局全体の問題として提案してみる価値はあるという感触を得た。

社内の複雑な人間関係をクリアして局長の富澤秀機氏に会った印象は悪くはなかった。「京劇公演」は観客を集めにくく、当時メディアの事業としてはリスクの多い事業といえた。新聞社の事業としてはかなり変わった提案に局長は決して驚いた印象ではなかった。彼は政治記者出身で

「国交正常化」の折の田中角栄首相の担当記者を経験してきた人だった。題材になっている「漢楚の戦い」も富澤局長の琴線に触れた感があった。

テレビ東京の事業部にも赴き事業担当者に提案の詳細を説明した。サンシャイン劇場の社長にも「京劇公演」のこれからの可能性について話を聞いていただいた。この両者は初めから難しさを感じさせた。両者ともに相応の障害になる要素を抱えているようだった。結論として日経文化事業局の総務ご担当の八木正行氏に呼ばれて、こう持ちだされた。「日経と五〇％の経費の持ち分を決めてこの事業に乗り出す気がありますか？」「それを了承いただければ東京、大阪、名古屋、福岡での公演に日本経済新聞社はお付き合いできます」という結論を披歴してくれた。東京以外の都市には観客動員に多少の不安を感じたが、了承せざるを得なかった。

富澤文化事業局長と会談した折に、観客動員には具体的な助けにはならないだろうが『人民日報』の共催を得られたらこれを歓迎しますか、と問いかけた。当時、我がビジネスパートナー宋麗紅女士のご主人は『人民日報』の社長兼編集長をしていた。富澤局長は社内の意向を取りまとめてみようと積極的姿勢を示してくれた。日本経済新聞社主催、人民日報共催の企てはスムーズに机上に乗った。

袁世海師の芸術監督

大連京劇団の范相成団長はすでに五度の来日公演を果たしており、彼とは気心の知れた老朋友である。私は毎夏大連を訪れるようになっていた。彼にはすでに私の構想を伝えてあった。《覇王別姫》をやってみたい、ついては幾つかの注文がある。一つは「漢楚の戦い」の通し狂言としての上演であり、一つは烏江の項羽の自刃までやりたい、ということだった。もし、地元の京劇ファンの常識を破ることにつながるのであれば「日本の京劇ファンのために上演する」ことを理由にしてほしい。もし、なお抵抗があるのなら、「演出 津田忠彦」にすることもやぶさかではない。とかなり突っ込んだ話までしてあった。

愛弟子楊赤の配慮があってのことだろうが、この一九九六年も袁世海師は大連にいた。海風が吹く大連は北京人には格好の避暑地になっているらしい。全編通しの《覇王別姫》の構想を袁世海師に直接話す機会を得た。この話をして、芸術監督としての参加を求めた。

袁世海師の芸術監督は私にとっては二度目の仕事になる。一九九三年に東京都は「友好都市芸術フェスティバル」として北京京劇合同公演を組んだ。北京市に存在する京劇団「中国京劇院」「北京京劇院」「戦友京劇団」の三団

合同での京劇公演を実施することになった。この企ての初めから袁世海師の芸術監督を私は想定していた。今では珍しくもないが、異なった劇団が合同で公演を行う習慣はほとんどなかった頃である。このこと自体が妙な話として受け取られていた。斯界の長老として袁世海師を芸術監督として指名した理由はそこにあった。

演目は《三国志》を選んだ。三団の合同公演だけあって豪華メンバーが顔を揃えた。諸葛孔明に張学津、周瑜に葉少蘭、魯粛に譚元寿、黄蓋に李長春、蔣幹に黄徳華、趙雲に葉金援、関羽に袁小海、糜夫人に閻桂祥、曹操に羅長徳、王文祉、加えて袁世海が曹操役で特別出演した。いずれも各団からの代表的俳優が集められた。演目は《群英会》《草船借箭》《借東風》《火焼戦船》《長坂坡》《漢津口》と豊富な内容を盛り込んだ。東京都の企画だけあってちょっとした贅沢が許された。この公演の初稽古は北京の金魚胡同にあった吉祥劇院で行われた。

一九九二年の真夏の暑い日だったのを覚えている。初めての通しの稽古を見て、私は日本側の演出担当としての意見を求められて、各場の転換に幕を引くことを止めて「暗転」を要求した。これはほぼ全員からの反対にあった。稽古は幕を引いて場面転換をしている。私は「暗転」にすることでスピードを要求した。袁世海師は柔軟な姿勢を示し、「津田の言うことを一度我々で考えてみよう」という折衷案を出してその場を収めてくれた。結局東京公演では「暗転」で行われた。一年後に北京で見た公演は各劇団も「暗転」を使うようになっていた。それ以来の袁世海師の参画である。彼はこの案にもっとも興味を示してくれる一人になった。梅蘭芳師の言葉を添えて激励してくれた。《覇王別姫》についてかつて袁世海師の方から「虞姫自刃のシーンで幕を下ろす」という案を提案した折、梅蘭芳師はこう言い放ったという。「今の客席の状況を見ての意見と思うが、やはり烏江の自刃までやるのが本当だろう。芝居全体の余韻を重んじれば烏江のシーンは残すべきだろう」と、梅蘭芳師の声色を使ってまで熱っぽく語り、愛弟子楊赤を起用して実現できることを喜んでくれた。その流れで大連京劇団への根回しは済んでいた。

私はさっそく北京の宋麗紅女士に大連京劇団の意向を報告し、『人民日報』共催の件について社長に了解を得る仲介を依頼した。日本経済新聞社の文化事業局長富澤氏は北京に向かい、人民日報社長王晨氏と会食することになる。以後王晨氏は日経の中国関係のイベントに招聘されて日経会長の杉田亮毅氏等と親交を結んでいる。

一九九九年二月、サンシャイン劇場で大連京劇団の《覇王別姫—漢楚の戦い》の公演が実現した。以後、この日経主催の京劇公演企画は現在に至るまで続いている。

二つの公演中止

二〇〇〇年に初登場した湖北省京劇院は主演俳優程和平の《孫悟空大闘天宮》が評判を得た。孫悟空なら程和平という観念が私の中にあり、彼で孫悟空の通し狂言を作るという考えは早々に出来上がっていた。

二〇〇三年に向けて《孫悟空三打白骨精》について程和平氏とは相談済みだった。湖北省京劇院もこの年に向けてこの作品を満を持して作り上げていた。年明けと同時に宣伝活動が開始されて二月上旬にはチケットが売り出しになる。日本経済新聞社の文化事業局は新しく着任したばかりの鎌田真一氏であった。ここでも「今日」の要素を大きく広げる事件が発生した。ＳＡＲＳの流行である。

鳥インフェルエンザとも言われる感染症が大発生し中国各地に広がった。私は別件もあって三月末に北京にいた。感染症の流行のため北京市内は静かである。異様に掃除の行き届いた街路は静まり返って、いつも利用するレストランも休業になっている。武漢に向かう予定も立てていたが、至急帰国せよという連絡が入った。局長命令だという。日経文化事業局からの指示で翌日の帰国便を押さえた。日本に戻った翌朝、会議に出席したが社会性を重んじる新聞社として中止は決定していたと同様であった。チケットの売れ行きは好調だったが、私が一通り中国側のＳＡＲＳに対する見解と入国の際の考えられる対策を聞き終えると、局長は中止の決定を宣言した。不特定多数の人々に御参集いただく催し物企画で何らかの危惧が考えられるとすれば、これは中止の決定は止むを得ないという結論だった。

私どもにしてみれば、招聘歴に初めての汚点が付いたことになる。一七年目にしての中止という憂き目に出会ったことになる。結果としては、当方の一方的な中止ゆえに劇団に対して相応のエクスキューズをしなければなるまい。程和平氏の落胆ぶりを思うと耐えがたかった。二〇〇三年は中止の止む無きに至ったものの、すでに出来上がっている作品として近年中の上演を確約した。公演中止ということでもう一つ忘れられない出来事がある。二〇一一年三月に起きた東日本大震災の影響を受けてしまった上海京劇院の《五百年目の孫悟空》だ。いろいろな意味での痛恨事であった。

二〇一一年五月中旬からの公演を組んですでに宣伝活動は開始していたし、チケットの売り出しはもう始まっていたが、最終の舞台稽古だけが残っていた。三月一三日にはこの劇院のホームグランド上海市福州路にある逸夫舞台で予定されていた。舞台写真の撮影とスタッフ用ビデオの収録は必須だった。主役は丑役者の厳慶谷である。厳慶谷は

日本で一〇回を超える公演経験を持っており最早ベテランの域に達しているが、孫悟空役は初めてだった。彼は日本への留学経験もあり、茂山流の狂言に入門する等の経歴をもつ日本通で、日本に多くのファンを持っている。我が老朋友の一人でもある。この芝居に彼は、盟友であり弟子筋の金毅全という美形の小生を玄奘三蔵に配役して、孫悟空役への熱意に溢れていた。

三月一一日午後、代々木付近を歩いている時に揺れが来た。尋常な揺れ方ではない。付近の歩道のガードレールに辛うじて掴まって揺れをやり過ごしたが、すでにＪＲの電車は止まっており、すぐに歩いて事務所までの道順を考えた。人々で溢れた神宮外苑の道から靖国通りに出るのに小一時間を要した。神保町の事務所に辿りつくのに三時間ほどもかかった。もうあたりは夕暮れが迫っている。明日は上海への渡航日という日だった。

翌日早朝、鈍行電車を乗り継いで成田へ急いだが上海便は運航していない。次の便に乗れる保証を取り付けるが今日中には飛ばないことが判明した。翌日早朝に飛べば如何にか稽古時間には辿り着けるはずであるが、時間までは約束できないという。しかもありなんと納得してＡＮＡ手配のＪＲ千葉駅付近のビジネスホテルに潜り込んだ。テレビは各局ともに映像はパターン化していて、水浸しになった仙台空港や各地の飛行場の映像が流れている。

次の日早朝に空港から至急に出向くよう電話連絡があって、慌てて乗り込んだ航空機は浦東の上海国際空港に着いた。朝の空港のテレビニュースは東日本大震災のニュース報道で溢れている。おびただしい海水に侵されてゆく港の光景や生々しい被害の様子が見てとれる。明らかに日本の国内報道は規制を受けていることを実感した。中国人のみならず空港に出入りする外国人が我々を日本人と知って励ましてくれる。

舞台稽古には充分時間がある。タクシーに乗り込み逸夫舞台に直行する。我々もそうだったが、この芝居が中止に至ることなどこの時点では考えも及ばなかった。幕が開いてそれぞれが持ち場につき、稽古に集中した。稽古が済んで、初めての孫悟空芝居に興奮気味の厳慶谷を労うと我々日本から出向いた人間の中に地震への心配が蘇った。劇院の連中は口々に地震の悔みを述べてくれたがほとんど上の空だった。

上海京劇院はこの数週間後に中止を申し入れてくる。福島原発の影響を心配してのことだった。この年は東京芸術劇場が補修に入り、初めて使用するル・テアトル銀座に劇場を設定していた。上海では福島と東京という近距離を憂慮したものだろう。福島原発の事故は国内でよりも諸外国の間で話題が沸騰していたと言えよう。

原発事故は時間がたっても解決策は打ち出されない。中

止の決定はやむを得なかった。チケットの払い戻しの作業にスタッフ総出で空しい業務をこなした。これは半分の経費を日本経済新聞社が負担してくれたものの、当方の欠損は一〇〇〇万円に及んだ。この年はこの事業が全てだった。この年度は大幅な赤字を生み、いまだに解消できないでいる。厳慶谷は後になって何回かメールをくれ、出演者の奮起を促して劇院側と交渉すると勇ましい言葉を伝えてきたがすでに終わっていた。

二〇一六年の干支は申年に当たる。今年こそ上演のチャンスとみてか、公演の件を厳慶谷は私に訴えてきたが、次の機会を待つように伝えた。数年後には実現する予定でいる。こうした二度にわたる中止の憂き目に会いながらも、日本経済新聞社との提携公演は大連京劇団の以降、現在まで続いている。

今日——烈風に晒される日本公演

毎年行われて東京芸術劇場中ホールは京劇公演の本拠地になっていった。以下、東京芸術劇場を中心に行った公演を列記してみよう。

一九九九年二月　大連京劇団
《覇王別姫—漢楚の戦い—》主演：楊赤、李萍
一九九九年九月　山東省京劇合同訪日団
《楊門女将》主演：郭躍進、任徳川、李萍
二〇〇一年五月　大連京劇団
《覇王別姫—漢楚の戦い—》主演：楊赤、李萍
二〇〇二年五月　上海京劇院
《白蛇伝》主演：史敏、李軍、金錫華、奚中路
二〇〇二年一一月　江蘇省京劇院
《駱駝祥子》主演：陳霖蒼、黄孝慈
二〇〇四年五月　湖北省京劇院
《孫悟空 三打白骨精》主演：程和平、張慧芳、朱世慧
二〇〇五年五月　北京京劇院
水滸伝《野猪林》主演：葉金援、羅長徳、尚偉、黄彦忠
二〇〇六年五月　上海京劇院
《楊門女将》主演：史敏、胡璇、李軍、唐元才
二〇〇七年六月　吉林省京劇院
《西遊記—火焔山—》主演：董宏利、李瑋、郭紅玉
二〇〇八年五月　遼寧省瀋陽京劇院
《花木蘭〜ムーラン〜》主演：李静文、常東
二〇〇九年六月　天津青年京劇団
《覇王別姫》主演：孟広禄、王立軍、楊光、趙秀君
二〇一〇年五月　湖北省京劇院
京劇三国志《赤壁の戦い》主演：王小蝉、程和平
二〇一二年六月　北京京劇院

京劇西遊記《孫悟空大鬧天宮》主演：李丹、詹磊
二〇一三年五月　中国国家京劇院
京劇三国志《趙雲と関羽》主演：趙永偉
二〇一四年五月　天津京劇院
京劇《覇王別姫～漢楚の戦い～》
主演：黄斉峰、王長君
二〇一五年六月　湖北省京劇院
京劇西遊記 2015《二人悟空真贋争》
主演：程和平、董宏利
二〇一六年六月　中国国家京劇院
京劇《白蛇伝 2016》主演：付佳、白瑋琛、張兵

繰り返すようだが、「今日」の時代をこの稿で厳密に区切ることはほとんど不可能なことではあるけれども、ある意味で日本人の中国に対する好悪の感情が目に見えて落ちかかってきた時からだとすれば、それは遡ること「天安門事件」になる。

現在の状況は、一説よると「日本人の中国に対する印象」は九〇％近い人々が「良くない」と答えるという。八〇年代までは八〇％に近い好感度を示す勢いだったが、「天安門事件」以後その数字は五〇％まで落ち込んでいる。呆れるほどの浮かれぶりを示す八〇％という数字にも驚くが、現状の中国嫌いが九〇％を超えるという数字も信

日本における京劇公演のための解説プログラム

写真提供：楽戯舎

じがたいものがある。以後の〇三年から〇四年にかけては中国への好感度が四七％から三七％へと大幅な低下となっている。中国原潜の領海侵犯や小泉首相の靖国参拝に対する中国の国家報道による批判が厳しい中、〇五年は、四月の反日デモ、中国の軍備増強等が影響して三二％とさらに最悪の状態に落ち込んだ。

〇八年は年初から中国食品の安全問題が起こって低下傾向はとめどない。来日する京劇団員すら北京その他の都市の大気汚染の悩みを一様に訴える。日本に来れば、いい空気を吸えるだけでもホッとする云々といった悩みはよく聞くし、彼らの実感でもあろう。先の尖閣諸島問題以後のアンケートは一段と手厳しい。度重なる中国情報に日本人が辟易している様子は明瞭といえる。

日本の「言論ＮＰＯ」と中国国営の中国日報社が共同で行った世論調査の数字がよく使われている。それによれば二〇一四年の発表で中国の印象を「良くない」「どちらかといえば良くない」と答えた日本人は九三％に上っているらしい。これをピークとして近年は平穏に過ぎていることもあってか若干は下がっているが九〇％に近い数字に衰えはない。とはいえ「このままの状況は、望ましくない、改善する必要あり」と答える日本人は七〇％を超えるらしい。「民間対話と文化交流の促進」という項目に一八・八％という数字が挙げられている。この声は中国側にも五〇％以上の声があるのは意外といえばいえる。ほんのわずかながらこんな数字も挙がっていることに、私どもとしては少しの慰めくらいにはなってくれるのだろうか。

こうした状況下で京劇公演を実施できるのかという疑問は、当然ながら私ども周辺に満ち溢れる。しかし、「天安門事件」直後の五〇％に中国支持が落ち込んだ時でも「京劇公演」は生きていたし、顧みれば数多くの中国芸能がこ四十数年にわたってステージ公演を行ってきたが、舞台芸術として日本の舞台に残ってきたのは京劇のみだった。また、こうした危うい時期だからこそ「京劇公演」を続けて欲しいという声は無視できない。若干の客観的要素としては何よりも日本経済新聞社というマスメディアが共催を続けている事実がある。

「京劇青少年劇場」中断

二〇一〇年に特定非営利活動法人京劇中心を成立させて、中国側にもこの存在を認めてもらった。財団法人日本青少年センターが「京劇の日本公演」を続けてゆくのには基本方針に大幅なズレが出てきたためだった。これで「京劇受け入れ窓口」を自前で持つことが可能になった。しかし、この年を最後に「京劇青少年劇場」はついに断念することになった。湖北省京劇院がこの年の春に大戯による

《京劇三国志》を実施した上、再度秋に来日して公演として「京劇青少年劇場」を実施してくれたが思う成果が得られないままに終わった。二六年にわたって続けてきたものだったがゆえに、何かせずにはおれず、読売新聞社教育支援部の助成を得ての事業継続も試験的に試みたが時の流れには抗しがたいものがあった。この活動は年若い時代に見た京劇体験が生かされて今日の大戯公演の固定客を形成している。京劇の普及活動には欠かせないものになっていたと言えるだろう。

この特定非営利活動法人京劇中心は赤字続きである。組織の存続を考慮して何らかの助けを得るべく、一口一万円の「賛助会員」の制度を導入したが、制度そのものをアピールする暇もないまま、かの国難に遭った躓きは大きく、折につけて声をかけてはいるが本格的募集体制は作れないまま現在に至っており、会員現有数は数百人に止まっている。東日本大震災で受けた傷をいまだに背負い続けている。「今日」時代の有りようは、見てきたように日中の関係が捻じれてゆく中での「日本の京劇公演」は烈風に晒されつつ何とか立ってきたといえるだろう。

明日

さて、「明日」の時代に話を移さねばならない。いわゆる一衣帯水の隣国とはいいながら昔から仲が良かったとはいえぬ国同士の日本と中国である。隣国ゆえの軋轢も多々存在する。同時にどなたかの言い草ではないが、おいそれと引っ越しできるものでもない。「京劇の日本公演」の導入を志向した当初には考えてもみなかったが、「明日」を語ることになれば、この隣国同士に共通の文化を育てる手立てを担う「京劇」に大いに期待してみたいと思う。

二〇一六年度の企画として中国国家京劇院を招聘したが、在日の中国大使館文化部や北京の中国文化部が私どもの公演活動に目を向けてやっと動き出した。以前にもこうした例がなかったわけではないが、文化部はじめ関係団体から支援を具体化しようという動きが出ており、二〇一六年の中国国家京劇院の招聘から支援を実施してくれた。また公益財団法人都民劇場の七十周年記念公演としての共催という支援を得て、無事に東京公演を打ち上げることができた。このツアーに珍しい客人が北京から同行した。中国対外文化集団公司の総経理張宇氏である。中国対外演出公司は二〇一四年から組織替えしてこの現組織になった経緯がある。

先年退職した宋麗紅女士はこの組織の幹事会長として定年を迎えた。張宇氏は中国対外演出公司の総経理に任じられてから長いが、私は彼の青年時代からの顔見知りではあった。北京や東京で彼と「京劇の日本公演」に関して意

見交換する場は数回あった。彼は自国の音楽の可能性に力を注いでいたらしい。「京劇の日本公演」に否定的立場を取り、私の京劇に対する熱の入れ方に批判的ですらあった。私には副総経理であった宋麗紅女士がいてくれてほとんどのことが足りており、どちらかといえば彼とは疎遠であった。その彼が日本の京劇公演に同行してくることは珍しいことでもあった。その総経理張宇氏から東京滞在中に宴席のお誘いを受けた。

彼はもともとハイテンションの人でその会合中に極上の表現で京劇のことや私どもの業績について誉めそやした上、これからの京劇事業への支援を申し出てくれた。この噂は在日本中国大使館文化部内でも持ちきりで、この事実に歓迎の意を表明してくれた。彼は部下に命じて具体策を講じるための資料を要求してきた。しかも早急にと注文が付いていた。その上、短い滞在中にも拘わらず日本経済新聞社の担当役員に挨拶に行きたい旨の申し入れをしてきた。あまりの急な要求にこちらの対応が間に合わず、一緒に日本経済新聞社に出向くことは叶わなかったが、後日に聞いたところではまずまずの上機嫌で日経を後にして空港に向かったという。

それにしてもどうした風の吹き回しだろう。京劇嫌いだったはずの彼が大真面目で京劇の振興について語るということだけでも私には驚きだったし、私のやってきたことに明確な賛意を示したことに信じられない思いがした。従来から在日中国大使館は私どもに対してある程度の好意的姿勢を示していてくれていたが、昨年の招聘劇団選定にあたっては早くから中国国家京劇院を強く推し、私どもの迷いを解消すると同時に私どもに北京の文化部対外文化連絡局アジア処とのコンタクトを取るよう指示を出した。

私どもは北京に出向きアジア処の要人にお目にかかりご挨拶を申し上げた。この折は前日本大使館文化公司を引かれた張愛平先生、何静先生ご夫妻も同席された上に、これからの京劇公演に向けてにぎやかな食事会になった。中国国家京劇院の公演が終わってから文化部副部長の丁偉先生が来日された。在日中国大使館文化部は丁偉副部長と私どもの会見を用意して下さった。副部長丁偉氏にこれからの京劇公演への支援について力強い言葉をいただいた。

私は二〇一五年中にこの先六年間の招聘劇院のラインナップを文化部に提出済みである。二〇一六年の中国国家京劇院からスタートして以下のとおりである。

二〇一七年　天津京劇院
演目を検討中。この夏にも訪中予定。
二〇一八年　湖北省京劇院
院長朱世慧氏目下考慮中。
二〇一九年　上海京劇院

厳慶谷主演《五百年目の孫悟空》を準備中。
二〇二〇年　北京京劇院
東京都との友好提携復活に向けて作品吟味中。
二〇二一年　国家京劇院　作品吟味中。

このラインナップに加えて、二〇一七年秋からは中国対外文化集団公司が力添えをしてくれるという学校向けの「京劇青少年劇場」の復活も予定している。公益財団法人日本青少年文化センターをはじめ地方在住の学校公演の復活を応援してくれるスタッフが待ち望んでいる事業展開にもやっと目を向けられるようになりそうだ。

二つの中国文化部主催公演

特定非営利活動法人京劇中心は、かつて二つの番外の公演を持った。いずれも結果的には「京劇の観客不足」に泣かされた公演になってしまったけれども「やればやれるんだ！」という証左は残し得たと思う。

一つは日本経済新聞社との共催事業の中に記録されている二〇〇二年一一月の公演として組んだ江蘇省京劇院の《駱駝祥子》である。この作品は一九九九年に北京で行われた第二回京劇芸術祭で金賞を獲得した現代京劇で、老舎の小説を京劇化したものである。江沢民主席が一九九四年に「伝統劇の改革」についての談話を発表し、それを受けて翌年当初に文化部が幾つかの具体的改革を打ち出した中にあった「京劇芸術祭」の第二回が北京で実施された。私はこれを見ることができた。文化部が奨励するところの「現代劇名作の京劇化」に属していた。これは感動に値した。

小説はもちろん、映画化されたものや話劇の舞台ではこの作品を見ていたが、解放前の時代のあまりにも暗い物語ゆえに成功したとは言い難いものがあった。それより「京劇化」されたこの芝居が最も素晴らしい出来栄えに見えた。口の重い主人公祥子の役柄が上手くはまって、心に思う祥氏の内面の表出が「唱」として生かされながら、ストーリーがいいテンポで展開してゆき、悲惨な運命の有り様が陳霖蒼の演出によってコミカルにしかも的確に描きだされる。決して暗さを感じさせないのである。時には笑いさえ起きていた。現代京劇に代表される「模範劇」も数本見ているが、それらとは比較にならない質の高さを見せつけられた。

京劇の可能性を押し広げ新しい演劇として認知される可能性を備えた作品として、私には映った。中国の文化部はこの作品の日本公演を望んだらしく、宋麗紅女士からこの話を受けた時、この仕事は何とか実現しようと強く思った。日本の観客に京劇の持つ新しい魅力を伝えることので

きる舞台を実現できる予感に震えた。

日本経済新聞社はこの年、年度初めに上海京劇院の《白蛇伝》を京劇演目に選び、五、六月に公演を予定済みだったが、ここに割り込む以外にはない。幸い東京芸術劇場のホールは空いていた。こうした経緯の中では日経文化事業局はこの作品には到底乗るまいと感じたが、一応話してみる価値はあると考えた。というのは、当時日経文化部の演劇記者であった河野孝氏が北京で私と一緒にこの芝居を見ていたからだった。

私は河野氏も動員して、日経共催の線を探った。中国文化部が推薦するこの京劇を日本公演するや否やは大事なことに思えた。基本的な条件は、劇団に対する出演料は不要であるということ、往復の国際旅費は中国側が負担し、日本側は国内の会場費、滞在費のみを負担すればよいというものだった。これも日経には強調しておいた。私は「京劇の持っている現代性」の大いなる宣伝材料を得た気分になった。新聞社としては年間を通じての共催行事に臨時に組み込むことは不可能に近かったが、どういう加減かこの企画が入り込めた。演出で主役の陳霖蒼氏は大変に喜んだのだろう。宋麗紅女士を通じてお礼を伝えてきたが、実は私も密かに喜んだ一人である。

現代京劇《駱駝祥子》の日本公演は実現したが、時間が足りなかった。あまりに拙速な宣伝といえたのか、「現代京劇」という打ち出し方に日本の観客は動かなかった。この失敗は中国文化部を失望させただろうと私は思った。何よりも私はこの失敗に悄然とした。大きなチャンスを逃してしまったような気がしていた。主演の陳霖蒼氏は公演後にいい芝居ができたと感想を述べ、日本側スタッフの技術を誉めそやした。京劇にしてはキッカケの多い芝居であったとは言いながら、我がスタッフは平然とこなした。

現代京劇だけあって装置もそれなりに新味が加わり転換も少なくはない。私どもにはさほど苦痛ではなかったが、長い間苦労を重ねてきた陳霖蒼氏はたった一日の稽古で本番を難なくやってのけるスタッフに感動していた。役者を生かすのは私たちの仕事である。言葉の違いを越えて仕事ができて〝当たり前〟な私どもの自慢のスタッフ陣だった。陳霖蒼氏はこれまで日本へ招聘したどの劇団からも称賛の的であったスタッフ陣を、あらためて誉めそやしてくれた。

もう一つの番外の公演がある。二〇〇九年の「ＴＯＫＹＯ京劇フェスティバル」と銘打った公演である。この公演はこちらから文化部に仕掛けたものだった。出演料免除、国際交通費中国側負担という好条件にも拘わらず準備不足のために躓いた先例を《駱駝祥子》で体験していた。この条件を獲得するにはどんな企画を考案すれば良いのかを考え抜いた上で持ち出した案であった。中国文化部が誇る優良

京劇団を一堂に揃えてみたらどんなことになるのか、私は劇団のキーパーソンを挙げてみて交渉にかかった。

湖北省京劇院は朱世慧院長の出世作《徐九経昇官記》。この時の副院長は程和平氏である。この話を持ち込むのは彼以外にいなかった。中国国家京劇院は二団の一級俳優趙永偉。二〇年来の我が老朋友である。彼を主役に《水滸伝》を組み上げよう。上海京劇院は厳慶谷しかいないが、すでにベテランの域に達している。劇団のリーダー的存在の彼がやりたがっている《烏龍院》ならどんな障害があっても作ってくれると思った。

もう一つ北京京劇院は外せない。院長は武旦の名優としてあまりにも有名な王玉珍師であった。彼女には仲間として話ができる。副院長の黒龍江省時代からの仲間である李師友、彼なら院内の何団にでも話が成立する。それぞれ勝算はあった。東京に京劇団の揃い踏みが実現することになるのだ。これなら文化部に申請しても可能性は充分という自信もあった。後はそれぞれの劇団にその意義を強調して出演料の無償を訴えるという難題が残る。

それぞれの劇団との交渉を開始する間に、宋麗紅女士と相談して彼女の基本的了解を得た。まず北京から始めた。スケジュールの都合で北京京劇院だけが団を出す日程を即答できないとの理由で保留になった。趙永偉は私たちと仕事を共にする機会を大変に喜んでくれた。武漢の湖北省京劇院は電話の連絡で済んだ。程和平は何としてでも院長の了解を得ると勇み立った。上海に飛んだ。厳慶谷と会うのは久し振りだった。浦東国際空港まで出迎えると申し出てくれたが、地下鉄の駅で待ち合わせた。曽祖徳副院長の許可を得れば問題ないことを確認した。

北京京劇院だけが梅蘭芳京劇団に決まったものの団長の李宏図氏の稽古日程が不明で詳細を決定できなかった。中国国内の段取りはできた。本来の目的通り、主催は中国文化部である。財団法人都民劇場が主管として基本的なところは手を貸してくれた。全新聞社の後援を得ようとしたが京劇と日経の結びつきのイメージが明瞭で、駄目になった。「京劇まつり」も思ったほどの盛り上がりを創り出せなかったのが心残りである。二〇〇九年九月二六日から一〇月五日までに公演を一六ステージ開催したが、観客の動員は決して満足のいくものではなかった。

湖北省京劇院　《徐九経昇官記》
　主演：朱世慧、張慧芳、王小蝉、江峰、程和平
中国国家京劇院　水滸伝《三打祝家荘》
　主演：趙永偉、徐孟珂、魏積軍、石山雄太
上海京劇院　水滸伝《烏龍院》
　主演：范永亮、熊明霞、厳慶谷
北京京劇院　三国志《呂布と貂蝉》

主演：李宏図、郭偉、韓勝存、黄柏雪、陳俊傑

フェスティバルに参加してくれた劇団はそれぞれにいい舞台を見せてくれたが、この種の企画を楽しんでくれるほどの観客が育っていなかったことを実感せざるを得なかった。もう約十年も前のことになる。

明日に向かって

「明日」の項の冒頭に書いたように二〇一六年から中国文化部からの支援はほぼ恒久的になろうとしている。一方、新しい観客を増やす取り組みもできている。日本経済新聞社文化事業局は二〇一三年から日経新聞の顧客であるＩＤ会員の参加を募って「日経アカデミア」という芸術、文化などを学ぶ講座を開催しているが、その一環として「京劇の愉しみ方」をレクチャーする講座も加えた。初めて京劇を鑑賞する人々に公開講座を持った。毎回結構な人数の応募が見られる。また公益財団法人都民劇場は二〇〇八年から「親と子の京劇鑑賞会」を始めた。京劇を話題にした親と子の会話を勧めることで、関心を高めていこうとしている。

ＮＰＯ法人京劇中心の季刊誌は発行以来八三号を数えている。もともと京劇仲間に読んでもらうための機関紙としての心算だったものだ。この新聞の購読者に向けて少人数での「バックステージツアー」も開始した。ステージ裏を覗いてみたいという観客の要望に応えようと試みに始めたものだが、楽屋の俳優に偶然会えるかもしれない楽しみもあって好評を得ている。これは「大戯」の公演終演後にセットされて、現在では毎回公募して評判を呼んでいる。

日本経済新聞社との共催事業の中で、地元スポンサーまで獲得しながら中止することになった福岡公演の復活の可能性や、新規公演地としての仙台、札幌等ももう少し具体化していきたいところである。

次代を担う若い世代がこの活動に参画できるような魅力を勝ち得たいと思いつつ進めてきたが、若い芽も着実に育っている。